

聖書における色彩の象徴性

The Symbolism of Colors in the Bible

城 一夫 共立女子短期大学 Kazuo Jo

①「光」として表現される聖書の「神」

キリスト教の教典である「旧約聖書」や「新約聖書」には、至るところに色彩が象徴的に描かれている。聖書では色彩を象徴的に神格化することによって創造者である神の秘儀を伝えるメッセージとして用いているのである。かつて迫害をしていたローマ帝国が、4世紀の半ばにキリスト教を国教として公認したということは、キリスト教のもつ神秘的な色彩象徴主義の秘儀を受入れ、ギリシャ・ローマ的なモノクローム世界からオリエンタ的なキリスト教のポリクローム世界に変容しはじめたことを意味している。

そこでキリスト教の聖典である新旧の聖書を引用しながら、聖書に表現されたキリスト教的な宇宙空間のもつ意味を考察することとしたい。

聖書は神のメッセージを伝えた人間の書であるが、そこでは旧約の神、そして新約の神としてのキリストは「光」として表現されるのである。

「神は光あれと言われた。すると光があった」
(創世記1-3)

「ここにひとりの人があって、神からつかわれていた。その名をヨハネと言った。この人は証のためにきた。光について証をし、彼によって全ての人が信ずるためである。(中略) 全ての人を照らすまことの光があって世に來た」(ヨハネによる福音書1:6-9)

キリスト教では神は光である。キリスト教美術では神は黄金か光で表徴されている。ビザンチン美術にみる黄金色の背景や光輪などは光の具体的な表現であり、またステンドグラスの色ガラスは神の象徴としての外界の光を投影してこそ、その光彩を放つのである。薄暗い教会堂に差し込む一条の光は、神そのものの表現にほかならず、そして神は光であるが故に、光の色彩的な表現である金色か白でもって表現されるのである。

「すると主の使いが天からくだってそこにきて、石をわきに転がし、その姿は稲妻のように輝き、その衣は雪のように真っ白であった」(マタイによる福音書28:2-4)

「その頭と髪とは、雪のように白い羊毛に似て真っ白であり、目はもえる炎のようであった」(ヨハネ黙示録20:11-12)

神の御座は白であり、雪のように白い羊毛に似て真っ白でありと聖書が伝える神の姿は、すべての色に染まらない白い光の色として描かれているのである。

②色彩空間としての「神の国」

旧約聖書ではシナイ山で神は予言者モーゼにイスラエルの人々が守るべき「十戒」とその捧げるべき供え物について事細かに記述している。

「あなたがたが彼らから受け取るべき捧げ物はこれである。即ち金、銀、青銅、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚り糸、山羊の毛糸、あかね染の雄羊の皮、じゅごんの皮、アカシア材、ともし油、注ぎ油と香ばしい熏香のための香料、縞めのう、エポデと胸当にはめる宝石。また彼らに私のために聖所を造らせなさい。(中略) あなたはまた10枚の幕をもって幕屋を造らなければならない。即ち亜麻の撚り糸、青糸、紫糸、緋糸で幕を作り、巧みな技をもって、それにケルビムを織りださねばならない」(出エジプト記25:3-26:1)(注:ケルビムは天使のこと)

ここで旧約聖書の神は、イスラエル人に対し亜麻の撚り糸、青糸、緋糸、紫糸、あかね染の皮などを捧げ物として出すことを望むとともに、同様な糸を用いて、神を祀る幕屋を造ることを命じている。同様にイスラエルの神は同じ色の糸を用いて神の衣服を作ること命ずるのである。

「彼らの作るべき衣服は次のとおりである。即ち胸当て、エポデ、衣、市松模様、帽子、帯であ

る。彼らは金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚り糸を受け取られねばならない。そして彼らは、金糸、青糸、緋糸、紫糸、亜麻の撚り糸を用い、巧みな技をもってエポテを作らねばならない。（出エジプト記28：5-6）

旧約聖書の神は、このように青、緋、紫、亜麻色、金などを特別な色として聖別している。西洋文明の一翼を担うキリスト教の美術は、実はこのような色彩の象徴主義が基本となっている。私達はビザンチンからバロック、ロココに至までの西洋美術には様々な表現でこれらの色彩が用いられている事例を数多く見ることが出来る。これらの色彩がゴシック以後のステンドグラスに用いられたのを始めとして、科学的な精神を身につけたルネッサンスの画家たちですら、聖母マリアやキリストの衣服に必ず赤と青の色を使ったのも、このようなキリスト教の象徴主義の現れである。

その上、旧約の神は、幕屋や衣服の中に色彩豊かな宝石の数々を嵌め込んで、究極の色彩の宇宙空間を形成することを命ずるのである。

「またその中に宝石を4列に嵌め込まなければならない。即ち、紅玉髓、貴橄欖石、水晶の列を第1列とし、第2列はざくろ石、瑠璃、赤縞めのう、第3列は黄水晶、めのう、紫水晶、第4列は黄碧玉、縞めのう、碧玉であって、これを金の編み細工の中に嵌め込まなければならない」（出エジプト記28：17-20）

この旧約聖書には幾度となく神に供え物とすべき衣服や宝石の色が記述されているが、その宝石の多くは紅玉髓、貴橄欖石、紫水晶、黄碧玉、瑠璃、めのう、黄水晶などであり、いずれも赤、瑠璃、黄、青、緑、橙、紫などで表徴される色である。これらの宝石は、先史時代からメソポタミアやエジプトなどで入手できたものであり、単なる装飾具ではなく、不思議な魔力を持つ護符や治療薬として各地で珍重されたものである。いわば宝石は死後の世界への魂の支えであり、来世への身分保証の重要な宝物であった。

このことは新約聖書における神の国の姿を描いた新約聖書の「ヨハネ黙示録」において、再び再現され、神の国がこのような宝石の色に輝く色彩の宇宙であることを表現するのである。

「その座に居ます方は、碧玉や赤めのうのように見え、また御座のまわりには、緑玉のように見える虹が現れていた」（ヨハネ黙示録4-3）との

記述がある。またこの終章に神の国、聖都エルサレムが色とりどりに輝いていると述べており、キリスト教の天国が12の宝石の色で彩られていると述べている。

「その都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであった。（中略）都の城壁の土台は、様々な宝石で飾られていた。第1の土台は碧玉、第2はサファイア、第3はめのう、第4は緑玉、第5は縞めのう、第6は赤めのう、第7は橄欖石、第8は緑柱石、第9は黄玉石、第10は翡翠、第11は青玉、第12は紫水晶であった。12の門は12の真珠であり、門はそれぞれ1つの真珠で作られ、都の大通りは透き通ったガラスのような純金であった」

以上のように聖書の描く神の国は、様々な色彩によって象徴される世界である。このことは新約聖書でキリストが十字架上で流した赤い血の色によって、一層象徴的なニュアンスを帯びていく。赤はキリストの犠牲のシンボルであり、現在でもキリスト教徒は聖餐式にブドウ酒を飲み、キリストの肉体の象徴である白いパンを食べる。これらの色彩象徴は単にキリスト教徒のみならず、西洋の日常生活にも深く関わりをもち、美術、衣服、祭礼、習慣、風俗などにしばしば表現されているのである。具体的には口頭発表で述べるが、その要点だけを以下に記述することとする。

③聖書に表現された色相の象徴性

白 — 神そのものを象徴し、靈魂の無垢、生命の崇高、純潔のシンボルである。

金 — 主権者、即ち神を表現するとともに、太陽不変、威厳、尊厳を表す。

赤 — 赤は互いに矛盾する意味を持っている。赤は神の愛、キリストの血の犠牲を象徴し、聖職者や殉教者、聖徒はいずれも赤の衣服を着用している。一方、赤は世俗の悪を象徴し、緋文字や淫婦の色となるのである。

青 — 神の国を象徴する。青は無窮、真実、婦人の貞節を表している。

紫 — 紫は至上の色であり、神の色として聖別されている。世俗的な意味でも王室、法王の色である。

緑 — モーゼが受託した石盤はエメラルド・グリーンであり、緑は希望、誕生を象徴する。

黒 — 闇を象徴する色であり、同時に清教徒、司祭の清貧の色でもある。